

August 25, 2022

PhilKH

早いもので、あれからもうひと月半以上経った。仏教式にいう、四十九日も過ぎようとしている。この間、あの事件をキッカケとする「世論」の動向に、私は、非常に深い感慨を覚えている。銃撃犯と思しき者が捕まって、その者が悪い、となったのは当然だけれども、そこから、あれよ、あれよ、という間に「YMGMが悪い」→「母親が悪い」→「KYOKAIが悪い」→「ABEが悪い」となり、そこからさらに「KYOKAIと保守政治家の繋がりを徹底究明せよ」、「国葬を許してはならない」と、誰かが予め筋書きを描いていたかのように、日本人たちの関心が一致して、その方向に進んでいるように見える。そういう流れは、最初は警察の取り調べのリーク（とされるもの）によって形づくられ、必要な補足説明を加える者がその都度の段階で現われた。まず、「YMGMは個人的恨みでABE氏を撃ったので、政治信条は関係ないといっているから、これはテロと混同されるべきではない」とさりげなくコメントした人間がいたかと思うと、「YMGMは成人なのに、彼のしたことによって母親がどう関わって責任があるのか？」と、尤もな疑問が一般世人から出て来そうになると、さっそく本人の伯父と称する人物（元弁護士？）が現われて、「彼は、子供の時からきわめて悲惨な境遇に置かれていて、その原因は母親のKYOKAIへの寄金にあった」と、こと細かに説明していた。次に「母親は信徒としてKYOKAIに献金していた。そのことについて、KYOKAIの責任を問えるのだろうか？」という疑問が出て来そうになると、ここぞとばかりに、長年カルト宗教問題に携わっている弁護士（ついこの間までは国会議員だったのかな？）といったような人たちが登場して、KYOKAIの悪辣な集金による被害の数多くの事例がどんなに酷いものであるのか、滔々と語る。さてそこで「KYOKAIが悪いということから、何故、ABEさんが悪い、ということになるのか？」といういちばんの疑問点——YMGMの自供では、教祖に近づけないから、代用の標的にした、ということらしいのだが——が「クローズアップ」されてくると、いよいよここはメディアの独擅場だ。突如として、「岸信介氏以来の関わりで、ABEさんは影響力が強いと睨んでいた」とYMGMが述べたようなことが「リーク(?)」される。「政治信条は関係ない」といっていたのとは、微妙にズレがあるようにも思うが、この際、細かいことは問題にならないのであろう、いずれにせよ、これは某大新聞の狙い筋、いよいよこれに入った、という感じだ。某大テレビも負けてはいない。さっそくKYOKAIのさる「友好団体」のイベントに寄せたABE氏のビデオメッセージを、嬉々として流して「クローズアップ」して見せた。とにかく日本のメディアは、よほどABEさんに対する恨みが深いのだな、と思った。積年の恨みを文字どおり最後の最後でいっぺんに晴らせる機会が訪れたのだから、それは喜び勇む筈だ。そこまで道をつけてしまえば、後はもう問題を普遍化してKYOKAIと保守政治家の深い繋がりを追及するキャンペーンを繰り返すばかりで、これはお昼のワイドショーや、モーニングショーのレベルでも十分やってくれる。

さらにまた、KISHIDA さんの勇み足による「国葬」のことが加わってきた。この流れで、国葬反対の論陣を張れ、ということなら、それはもう、新聞テレビの鳴り物入りで、野党、弁護士団体、市民団体等々総出で繰り出して「国民的」に展開することは容易い。もうこれは止めようもないのだけれども、ただこの中で、コメンテーターだか何だか、こういう時のオピニオンリーダーを自任するような人たちが、「弔意を強制してはならない」「ABE 氏を神格化してはならない」とかの発言をして、それでも何か意味のあることをいったかのような気になっている様子であるのを聞くと、正直、どうかと思う。「国家」による「葬儀」などと聞くと、日本人の性格からいって、堅苦しい感じを抱かざるを得ないであろうということ、それなのに、慎重な筈の KISHIDA さんがその辺を十分に考慮せず、いつになく即断に走ってしまった感がある、というのは否定しないけれど、本来、国民的な規模で ABE さんのお別れ会を催そうという気運は、弔意の強制とか神格化の意図とはまったく関わりなく、人々の間から自然に高まってきて当然のものなのだ。それは、常識的な感覚を持った人なら、理解できる筈だ。通算で 8 年以上（でよかったかな？）もの長期間、国の政治の最高責任者としての務めを果たした人である。対外的にいっても、日本だけをいまだに前科者扱いしようとする国連体制の続いている国際社会の中で、いろいろな国々の首脳たちとの信頼関係を築くことに心を砕き、日本の国際的地位を上げることに成功した。その成果の高さが、これまでのどの総理大臣にも勝るものであったことは、この度の不幸に際して、世界各国の数多くの首脳たちからいち早く寄せられた弔意によって、明らかに示されているのではないか。日本国民としては、そうした各国首脳から受けた生前の ABE さんへの厚誼に感謝する意味でも、相応しい格調のある催しの場——「葬儀」というのはどう考えても的確ではないから、内容的にはやはり「お別れの会」なのであろう——を設けて、それらの方々に来ていただけるようにすべきなのだ。弔意を強制してやろうとか、ABE さんを神格化してしまおうとかいうことを、一体常識を持った国民のうちの誰が考えるというのだろうか？ ひょっとして、それは、コメンテーターとかの先生が、自分がテレビに出て喋る時のために、脳内で急遽でっち上げたものではないのだろうか。いや、おそらくそうなのだろう。何といっても、そういう方々は、仕事柄、放送席の高い所から国民に向かって「そんな考えをしてはダメだ！」と批判的御託を宣わんがために、まずもって批判のタネとしての「そんな考え」を用意しておく必要があるに違いないのだからである。だが、そんなことはその人たちの勝手にさせておくとして、普通の常識を持った人が、ABE さんのような人のお別れの会を催したいと思う時、その意図は何か、といえば、それはまさしく弔意の強制とか神格化とは正反対の態度で以て ABE さんを送り、今後のために ABE さんの業績に対する客観的評価を定着させる出発点にしよう、ということにはほかならない。冷静な客観的評価に徹することを約束して、次に進みましょう、という国民にとって不可欠の区切りをつけようというための催しであるのだから、好き嫌いだの政治信条だのという野暮なことといってないで、皆参加すればよいのだ。「私は、ABE さんに対して批判や反対ばかりでした。好きでもありませんでした。今でもまったく同じ考えです。ですから弔意は表わせません。ただ大きな影響力を持

っていた人が去って、善きにつけ悪しきにつけ、時代に一区切りついた、ということは、他の国民の皆さんとしっかり確認しておきたいと思います」「こうして世界中の人たちも集まって、お別れの儀式が行われたのですから、これを機会として、ABEさんの功罪を客観的に評価するという態度に、今後は徹していくということを、皆で確認しましょう」——こういえばいいだけのことなのだ。そんなことも分からず、いったい、何を才気走ったつもりで、MC口利いているのだろうか？ただ、もう一度いうけれど、「国葬」という語が担っている、とんでもなく重苦しい想念のことをよく考えて検討してみることもしないで、軽はずみな決定を下してしまったのは、KISHIDAさんの失敗である。自分の力でできる範囲を弁えるべきであった。妥当なのは、せいぜい、NAKASONEさんの前例に従っての「内閣・自民党合同葬」であったと思われる。「内閣・国会葬」でもいのように思うけれども、毎度反対のための反対をして何でもかんでもとにかくケチつけようとするような人たちには、関わらせないようにするのが、賢明というものである。なお、私はといえば、KISHIDAさんが言い出した当初は、「国葬」に賛成であった。上述のことからお分かりいただけるように、「国葬」というのはやや大げさすぎるかな、という気持ちはあったものの、とにかく何かその種の催しを行なうのは、相応しいことと思えたのである。でも、そのうちすぐに、番組のMCがどういっているか、とか、大新聞で川柳の集いが催されたとかいうことを聞くと、つくづく、いやになった。最近では、ネットのニュースでも「国葬」とかの見出しがあったら、絶対に見ないことにしている。「国葬をやめさせろ！」のガヤガヤ騒ぎで、日本人の変態ぶりがいっぺんに表に現われてきたように感じられているからだ。思うのだが、「国」とか「国家」とかの観念が絡んできた時に日本人の呈する奇異な心的状態は、「自虐」とか「反日」といった語では、とても十分に表現しきれない。まさに変態そのものだ。世界中、他に類を見ない変態国民である。肝心の「国民」がこんな有り様である以上、無理して「国葬」なんか行なってみても、日本が「国」としての体を成していないことを暴露して、世界中に恥を晒すだけだから、やめてしまえ！最初は私も、「国葬」が世界規模での外交の場として活用されるとすれば、それこそABEさんを記念する会に相応しいと思い、本気でそれを期待しようと思った。ひょっとすると、プーチンさんも、そしてゼレンスキーさんも訪れて、会談の場を持てるのではないだろうか、と儂い希望を抱きもした。でも、それはあっけなく打ち壊された。そもそも冷静に考えるならば、誰でも気づく筈だが、今、日本は、世界各国の要人にお出でいただくということを、望んでいい立場にはない。あまりにも杜撰な警護体制でABEさんをむぎむぎ死に追いやってしまったというのに、いまだにそれに対する責任をはっきり取らせることすらしていない。そんな日本警察が、世界中から訪れる要人たちの安全を、間違いなく確保できるのだろうか？こちらがそれを約束しようと思っても、世界の国々は、日本の警察の警備を信用してくれているのだろうか？あんな危ない所に、自分たちの元首を行かせて大丈夫なのだろうか、と内心危惧して困惑気味であったとしても不思議ではない。それでも外交儀礼を重んじて、前職の人を出す、というあたりに落ち着くのだろう。そういう形でどうにかこうにか実現したところで、本来、ABEさんを記念するに相応しい筈

の外交の場というには程遠いであろう。要するに、土台、自分の手に余るようなことは、為そうとすべきではない。「国葬」などやめておけ！

とにかく、日本人、頭だいじょうぶか？と聞きたいのだ。通算で8年以上（数字は正確かどうか、分からないが）もの長期間、自分たちの国の政治の最高責任者の地位にあった人であるぞ。そんな人に、あんな酷い危険な場所で、ろくに警備もつけないで、演説をやらせて、そんな人を、むざむざ、あんなつまらないヤツ——彼の自供内容として漏れ聞くところから判断すれば、こうとしかいいようがないであろう——に、教祖の代用標的扱いで、自家製のちやちな散弾銃もどきを使って、まんまと撃ち殺させてしまったのだ。そのことに対して、口惜しいと思い、強い怒りを覚えられるのでなくて、どうする？「個人的恨みによることから、テロと混同視してはならない、民主主義に対する挑戦というのも当らない」などと宣って、何か気の利いたことを言えたような気になってもらいたくない。現職の国会議員が、選挙の応援演説中に凶弾に倒れたのだから、これは紛う方なく民主主義を破壊する行為だ。YMGGMの境遇を可哀そうに思って涙する前に、先ずその行為を憎まなくてはダメだろう。「罪を憎んで人を憎まず」というのは、その傾向の人たちが、好んで口にしたがる言葉の一つであろうが、本当のところは、それは、彼らの甘ったるい人道主義・博愛主義の気分を満足させるためにあるような言葉ではない。現実起こった凶悪な事件を目の前にした時に、なおその言葉の趣旨に適う心でいるためには、どれだけ正確な事実に対する認識力と、どれだけ冷徹な人間性に対する洞察力が必要とされるのか、今回のケースなどは、彼らにとってそのことを学び知るための最良の機会である筈とってよい。だが、無理であろうな。何せ、まだ起訴もされていないうちから、大騒ぎして減刑運動を繰り広げ、こんなにも署名が集まったぞ、とって、得意になっているような人たちだ。そんな珍しい人たちは、世界中探しても、恐らく日本以外では見つけることができないと思う。ところで上に「あんな酷い危険な場所」といったけれども、これは、我ながら、まったくそのとおり、100パーセント的中表現だと思っている。近鉄大和西大寺駅前に縁のない方でも、グーグルアースか何かで見れば、それは分かっていただけの筈だ。私のように、あの場所に結構親しみ深い者——当日も私は、近鉄電車の乗り継ぎのために、行きと帰りの2回、お昼の11時頃と12時半頃に大和西大寺駅を通っている。2回目の時は、今、考えてみれば事件が起きてから間もなくだったわけで、惜しいことをした、といわざるを得ない。所用で出先に在ったので、事件のニュースをまだ知らなかったのだ。それで、駅の外に目を遣ることを考えもせず、すぐにやって来た乗り換え電車に乗り込んだのであった——であれば、事件の発生場所を聞いた時、何よりもまず、「いったい何故あんな場所で演説させられたのか？そもそもあの場所を使うことがどうして許可されたのか？」と呆れ返った筈だ。あの場所を、言葉で説明するのはなかなか難しいが、ごく大雑把な説明を試みるならば、最初に言っておきたいのは、あそこは車道の中にポツンと取り残されている小島みたいな場所で、周囲をガードレールで囲まれ、地面にはゼブラ線が引かれている、絶対に人が入ってはいけない場所だ、ということである。どうしてあそこにそういう場所ができていいのか、ちょっと分からないのだけれども、その地

点は、大和西大寺駅北口に沿っている県道 104 号線（谷田奈良線）から、近鉄百貨店やスーパー・ならファミリーの方へ行く道が分岐する所、その分岐点に、県道 104 号に接するようにして、四角洲が存在している、という形だ。県道の方がかなり狭いのに対して、百貨店に向う道の方はもともと広くて、中央分離帯を持っているようなのであるが、その中央分離帯のいちばん端、県道 104 号に接する部分が、横断歩道によって切り取られて、あんな形になって残っているように見える。県道 104 号利用者（自動車、バイク、自転車）からすると、迷惑以外の何ものでもない小区画である。県道 104 号線を西から東へ走るとするならば、片側一車線、しばらく線路に沿って行くと、やがて右手に、大和西大寺駅北口が見えてくる。駅に出入りする人たちの横切る横断歩道（信号無し）があるから、相当気を遣いながらようやくそれを越えると、次に、左手に見えてくるのが、百貨店に向う道への分岐点で、そこに四角洲がある。ちなみに右手はバスの停留場にもなっている駅前ロータリーへの入り口で（ということは、そこからの出口でも）ある。県道 104 号は、とにかく狭い。奈良市西部の繁華街、最大の駅前ということで、そこを行き交う自動車の数はたいへん多い。自転車も盛んに通る（YMGGM が捕まっている時に、何気に傍を通り抜けている自転車のお爺さんがいる、というので、話題になっていたが、あの場所をよく知っている者にとっては、あれごく普通。自転車は、傍で何が起こっようとも、自分の通れる隙間がある限り通る）。奈良交通の大型バスも出入りしている。さらに上述の、人通りのきわめて多い信号無し横断歩道もある。そんなわけで、この区間を自動車で通り抜けようとする、毎度毎度、相当に神経を擦り減らさざるを得ない。特に、左手にあの四角洲を見る時には、それが宛もこちらの道の方に迫り出してきている如くに感じられるので、これはウツカリ目を逸らすとガードレールに擦ってしまいそうだ、とか、ハンドル切り損ねたらガードレール破って突っ込んでしまいそうだ、といった恐怖感にその都度襲われるといっても、決して誇張ではない。だが、一体何のために、こんなことをくださと述べたのかといえ、それはつまり、要するに、あんな場所で ABE さんともあろう人に演説させるなど、本来絶対にあるまじきこと、あり得ないことである、といたいからにはほかならない。警護が不備であった、とかいう以前の問題である。後方の警護がお留守になっていた、というけれども、そもそもあんなに交通の激しい車道と、さらにその背後に大型バスがいっぱい停まっているような「後方」を、どうやって警備しようというのだ。暗殺犯がバスの陰から忍び寄ってきても気づけないであろうし、さらにその者が、車の流れが途切れた瞬間を捉えて車道に飛び出しても、こちらがタイミングを逃さずそれを取り押さえることは至難だ。現に YMGGM が飛び出した時、歩道で張っていた 1 人の警官は、遅れまいとして、きわめて乱暴に周りの人を突き飛ばしながら車道に飛び出して行ったから、彼の所為で車道上に仰向けに倒された女子高生と見える人は、危うく命の危険に曝されるところであった。あるいはまた、後方には選挙カーを停めて後ろ盾とすべきであった、という人もいるかも知れないが、上述したことから明らかなおとおり、あの位置にそんな大きな車を停めることなど絶対に無理だ。そんなことをすれば、あの道を通行するすべての自動車、自転車、バスの運転者たちに、計り知れぬ渋滞の苛立ち

と正面衝突の恐怖を与えることになる。いや、そんなことよりも何よりも、上述のとおり、あその場所にはゼブラ線がはっきり引かれている。人が入ることは、絶対にあってはならないのだ。どうして、あそこに、それも選挙応援のためというから、かなりの人数で、入り込むことが許可されたのか？奈良県警には交通課もないのか？そういうと、必ず、いや、希望してきたのが権力政党の自民党であったから、県警も止められなかったのだ、という人や、さらには、民衆に近寄って人気取りしたいと思った ABE が、「あそこを使わせろ！」と、恫喝したので、誰も止められなかったのだ、という人が出て来て、話をわけ分からないものにしてしまいそうだから、そういうことなら、是非とも、本当はどういう経緯であったのか、はっきりしておいてもらいたいと思う。私としては、たとえ ABE さんがあその場所を使うことを強く望んだとしても、それを止められなかったのは、ABE さん側近か自民党奈良県連の落ち度であった、と考える。余計なことかもしれないが、TKICH さんの沈痛な様子も、一つには、そのあたりの事情に関わっているように、私には思える。地元の人なら、あの和歌山西大寺駅北口というのが、どんなに演説会には向かない、危険な場所であるか、よく分かっていた筈だ。ちょっと機転を利かせ、政調会長の権限にモノを言わせて、県連に圧力をかけて、近鉄奈良駅前か JR 奈良駅前に代えさせておけば、こんなことにはならなかったのに、と思えば、TKICH さんとしては、いくら悔やんでも悔やみきれない気持ちであるに違いない。

さて、警備のお粗末さを日本中に、というより世界中に曝け出してしまった奈良県警だが、その後、捜査はちゃんと進めているのだろうか？問いたいのは、容疑者の取り調べのことではない、捜査の進捗のことである。もちろん、前者も含めて考えてもいいのだが、この段階での「捜査」という語の下に理解されるべきものは、主として、遺体解剖所見に基づく銃弾侵入経路と致死傷の確認、YMGGM の所持していた銃もどきの性能の検証、YMGGM の接近経路と ABE さんの立っていた位置との関係から、被弾状況の合理的解明、そして何よりも使われた銃弾——致命傷を与えた銃弾はもちろんのこと、発射された筈の銃弾すべて——の回収といった作業である。つまり、立件に向けての客観的根拠となる、銃殺のメカニズムの合理的解明と物証の確保ということである。これらのことに関して、メディアは、事件発生から 2、3 日も経つと、もうまったく報じなくなった。その代わりに、YMGGM の動機（母親→KYOKAI）に関する供述は次々とリークされ、そこからどういう流れになって行ったか、ということは、最初に述べたとおりである。この対照に何ともいえない不気味さを感じているのは、私だけであろうか？とにかく、情報が与えられない、だから、何ともいえない、というべきところかもしれないが、辛うじて伝わってきた、ごく乏しい情報から判断すると、どうも捜査は思うように進んでいない、奈良県警は追い込まれている、と心配しなくてはならないように思わざるを得ないのである。乏しい情報を、とにかく一般に伝えてくれたのは、国会議員の青山繁晴氏である。国会のテロ対策委員会に警察庁の人（つまり捜査に直接あたっている奈良県警の人とは別）を呼んで質問した時に出て来た答えの問題点を YouTube のチャンネルに上げてくれていた。その特に重要な点と思われるものを、ここに私なりの表現

で紹介してみると：「司法解剖の結果から、銃弾は左頸部から侵入し、心臓には直接に損傷を与えなかったが、鎖骨下動脈を破壊して大出血を起こさせたので、それが致命傷となったと認められる、射出口は認められないので、銃創は「盲管銃創」であった。しかし、その弾丸は見つかっていない」とのことであった、という。当然、青山氏としては、盲管銃創なのに弾丸が見つからないという重大な矛盾点について、重ねて問い質したのであろうが、それに対して「致命傷を与えたもの以外の弾丸が見つかったので、捜査に支障はない」といった意味の答えがあったとのこと。また、司法解剖における監察医の所見とされるものが、その前に行なわれていた、救命治療に当たった奈良県立医大チームのチーフである福島教授の記者会見での発表内容と大きく食い違うこと——福島氏は、右頸部に2ヵ所の射入口を認めたといい、心臓が大きく損傷して大出血していた、と説明していた。なお、弾丸については、福島氏も、体内には見出されなかった、と語っていた——も、当然、青山氏が指摘したのであろうが、これに対して警察庁側は「その食い違いのことは承知している」とだけ、答えたようである。青山氏によるこの暴露以後、また情報は途絶えた。それからほぼ1週間後になってやっと、NHKが「捜査関係者」から聞き出し得た情報なるものを伝えた。といっても、それは到底、青山氏の提示した内容を超越するものではない。「捜査関係者」は、ABE氏に致死傷を与えた弾丸は見つかっていないことを認めたが、他の弾丸を確保してあるから、捜査に支障はない、と答え、司法解剖医の所見と福島教授記者会見との内容が食い違うことは、「承知している」と答えた、とだけ報告されているにすぎない。それ以後、またメディアは、この関係にはダンマリを決め込んでいる。青山氏は、暗殺の真実を追及し続けることを宣言してはいるものの、氏を以てしても、あれ以後、有力な手がかりを掴むことは難しい状況であるように見える。ただ、上に挙げただけの情報から、私など直感的に、「奈良県警は追い込まれている、YMGGMを犯人に仕立てない限り、迷宮入りにされてしまう、と、思って、完全に焦っている」と思うしかないのだ。致命傷を与えた弾丸は見つかっていないけれど、その他の弾丸が見つまっているから、捜査に支障はない——警察庁であれ、捜査関係者であれ、およそ責任ある警察の人間がこういう説明をした、ということは、まことに驚き以外の何ものでもない。青山氏のチャンネルで見た限り、氏は、この「その他の弾丸」を、ABE氏の体内に撃ち込まれた2弾のうちの、体内に留まっていた1弾と受け取ったようである。ABEさんが被弾したのは、2弾であって、そのうち致命傷を与えた1弾は——盲管銃創であるにも拘らず——見つからないのであるが、もう1弾の、致命傷を与えるに至らなかった方は、体内に留まっていて、それが回収されているから問題ない、という意味に、警察庁側の説明を解したのであろう。たしかに警察庁が「それで捜査には支障ない」と主張している以上、そのように解釈する以外にないように見える。ただし、そうしようとすれば、実は、その前の福島教授記者会見との間に決定的な矛盾を生じさせてしまう。何故なら福島教授は、端的に「体内に銃弾は見出されなかった」と語っていたからだ。救急救命医の立場から、救命処置のための必要性に基づいて銃創を探し出し、体内に入っている銃弾を見つけ出して除去しようとする。当然、CTスキャンも撮っている。でも、銃弾は一切見つからない

かったから、「見つからなかった」と説明しているのだ。後から司法解剖を行なったというが、その時にそんなに都合よく、「致命傷を与えなかった方の銃弾」が体内に残っているのを見つけた、などという話を、どうやって信じよというのだろうか？結局のところ「その他の弾丸」は、はるか後方の、ならファミリー立体駐車場のコンクリート壁に着弾したという3個のうちにはしか見つけようがない、と思わざるを得ない。このコンクリート壁にめり込んでいたものは、どうにかほじくり出せたので、それを基に「銃弾は黒色をした、正露丸の粒を大きくしたみたいなもの」とか、いっているだけのことなのだろう。そういうものが見つかるから、YMGGMの銃砲もどきによってABEさんが殺害されたことは十分証明できる、というのか？そういうものが立体駐車場のコンクリート壁から出てきたから、それでYMGGM単独犯行を立証するのに十分である、というのか？そもそも、致命傷を与えた銃弾の発見はもちろん最重要に違いないけれど、それをひとまず措くとしても、総じて発射された弾数と回収された弾数をきちんと対応させようとする努力が為されているのだろうか？銃砲もどきは散弾銃仕様になっていたといい、一度に6弾飛び出した筈だというのだから、2回撃って、計12弾が飛び散ったことになる。ABEさんが被弾したのが、そのうちの1弾または2弾、立体駐車場の壁にめり込んでいたのが3弾で、あとは立体駐車場よりは手前に路上駐車してあった自民党選挙カー上方の看板に当たって突き抜けた跡が3つある、というのだから、結局ほとんどの弾が見つかっていない、「消えてしまった」ということになる。しかも、それだけの数の弾が、当たるも八卦当たらぬも八卦的な飛び散り方をしたと考えるほかない状況だった——自家製の銃砲もどきをぶっ放した、という話だ——というのに、あの狭い人混みの中で、ABEさん以外に誰一人として、かすり傷さえ負わせていない。そしてABEさんにだけは、ものすごい精度で命中した！これ、さすがに世間でも訝しがられている、ということ、当局も気にしているようだ。先日、YMGGMが供述の中で、「周りの人に当てなくてすむように、と気を遣って、できるだけ近い距離にまで進み出て撃った」といっている(!)、というような「リーク記事」が出ていた。警察もずいぶん姑息な手を使うものだ、などと思っではいけない、と思いつつ、そう思わざるを得なかった。

奈良県警は、YMGGMの持っていた銃もどきから発射されてABEさんに致死傷を与えたものと同定される銃弾を示し得ない限り、物証を持っていない、といわれねばならない。物証がなければ立件できない。だから、このままの状態、奈良県警が起訴を希望しても、奈良地検はそれを許さないであろう。県警が強引にYMGGM単独犯行であることを指し示す自白と状況証拠をかき集めて、泣き落さんばかりにして、地検を納得させて起訴に踏み切らせ、裁判にまで持ち込んだとしても——それは実現するとしても、早くて再来年か——、YMGGMが自供を翻して「あれは空砲だった」とか「当たっていなかった」とか言い出したら、たちまち公判維持できない、という情勢になってきて、「無罪」判決に至ってしまうであろう。YMGGMが捕まった時の状況からいって、たとえ「殺人」は立証できないとしても、その場合、少なくとも「殺人未遂」か「殺人幫助」は成立して「有罪」判決は取れるであろう、という人がいるかもしれないが、そんな判決——それは「致命傷を与えた真犯人が別に



いる」という認定を必然的に含意する——を、裁判所は出す筈がない。裁判所はあくまで、検察の出してきた「殺人」という罪状に関して、検察の挙証が十分に合理性を持っているかどうかを審査するのであって、それが疑わしいと判定された場合には、「疑わしきは罰せず」の原則に基づき、当該罪状に関して「(推定)無罪」なる判決を出すのである。だから YMGGM は、殺人で有罪にならないならば、端的に無罪になる。そうすると ABE さん暗殺という大事件が、何とそのまま完全迷宮入りという帰結——あらためて真犯人を探そうにも、その糸口はもう失われているので——になってしまうのだ。その社会的影響の重大さを考えれば、奈良県警が暗澹たる思いに沈みつつあるのが、手に取るように分かる気がする。とりわけ今、奈良県警を追い詰めているのは、初動捜査の失敗から、他の(あるいは共犯として他にも)犯人がいた可能性を潰せないままに探究放棄してしまい、それでいて、YMGGM の単独犯行を立証するための決定的物証を見つけ損ない、あるいは失ってしまった、という手詰まり状態のヒシヒシとした実感であろうと思われる。初動捜査の失敗のことは、あまりいわれていないようだが、考えてもみよう、あの杜撰な警備体制の中で、事件は起こったのだ。警備の欠陥がそのまま初動捜査のミスに直結するのは、当然過ぎるほど当然ではないだろうか。事件発生後間もなく、四角州の中で ABE さんが倒れる時の様子を生々しく伝える映像が、YouTube に上げられていた。CNN で流されたものだともいわれていたかと思うが、詳しいことは覚えていない。とにかく、至近距離から撮ったかと思われるほど、鮮明な映像だった。それによって見るならば、YMGGM の 1 発目が響いた時、2 人の警官 (SP に当たるのかどうかかわからないが、とにかく黒い服装の人たち) が四角洲に飛び込んで、ABE さんの背後に立った。ABE さんも、この時演説台の上で、時計と反対廻りに、振り返った。2 人の警官は、ABE さんの方は見ないで、車道上の YMGGM に対峙して、ABE さんを銃弾から守るつもりであったのだろう、しっかりと身構えた。だが、そんなことでは、彼らは防護楯にはなり得なかった。1 人の警官は、カバン型防弾鉄板を持っていた。当然、これを広げて身構えたのだが、申し訳ないけど、はっきり言ってあの人は、鉄板で自分の顔を覆っていたに過ぎない。そのようにしか、なりようがなかった、というのはよく分かる。防弾チョッキを着ているのだから、自分の体のうちで覆うべき部分といえば顔しかない。体全体で ABE さんの盾になろうとすれば、自分の顔を覆って YMGGM 銃の前に立ちはだかる、という形しかないわけだ。もうひとりの人に至っては、思い切り自分の身を縮めるようにして身構えていた。たしかに、彼は、鉄板も何も持っていないのだから、まず自分自身が YMGGM 銃に当たりにくい体勢を作らなくてはならなかった。その上で、体全体で ABE さんの盾になろうとしたのである。ABE さんは、といえば、決して背が低い方ではなく、おまけにあの時は演説者用台に乗ったままだった。ABE さんの胸から上部分は、YMGGM からは、2 人の警官の肩越しに十分見通せるような位置関係にあったであろう。この時、あの 2 人は、何故 ABE さんに飛びついて覆い被さろうとしなかったのか、そうしていれば、ABE さんは死なずに済んだであろうに、とは、もうさんざんいわれたことである。だが、今いいたいのは、それとは別のことである。彼らがあのような体勢をとったことによって、たとえ次の瞬間にどこか別の方か

ら、ABE さんを狙った銃弾が飛んできたとしても——ABE さんの右の襟がヒラヒラ揺れた、と画像を見た人たちによって、さんざんいわれたその瞬間のこと——、それには絶対誰も気づけない状況を作ってしまった、ということである。これはもう、初動捜査ミス範囲に入っているといわねばなるまい。さて、あの動画で見られた次の場面、YMGGM 銃の 2 発目の音が響いたかと思うと、ABE さんが崩れるように倒れ込んだ。2 人の警官も、それに気づいて振り返ったのだが、2 人ともその場で ABE さんを介抱しようとはせずに、ただちに発砲者を捕らえるべく、車道に飛び出していった。向こう側の歩道から飛び出してきた 2 名（うち 1 名が女子高生を激しく突き飛ばして車道上に仰向けに転がした加害者だ）と合体して 4 名ぐらいで YMGGM を取り押さえていたと思う。ABE さんの介護はおそらく何名かの運動員に任せられ、その人たちが必死になって救急医療の心得のある人を呼び求めていると思う。警官が、倒れた ABE さんを直ちに介抱していれば、彼らなら銃弾の射入口をすぐに突き止められた可能性は高いし、また、そこに銃弾がこぼれてでもいようものなら、絶対に見落とす筈はなかったと思う。倒れた ABE さんの周りに、捜査の専門員が付かなかったことによって、最重要であるべき、直後の現場検証の機会が、取り返しのつかない仕方で失われてしまった、といわざるを得ないであろう。以上のようなわけで、今、奈良県警は、初動捜査の失敗を引き摺っていて、しかも自分でも内心ではそれを強く意識しながら、それでも表向きは YMGGM 単独犯説を押し通す姿勢を絶対に崩せないという、きわめて厳しい状況——「窮境」とでも表現すべきか——に追い込まれているのである。だから、一方では、「物証も出せないのに、起訴することができるのだろうか？」と危ぶむ声が絶えず、他方では、「こちらの方が銃殺のメカニズムを無理なく説明できる」と主張する「スナイパー説」が、次から次に、いろいろな形をとって現われてきて、後を絶たない。最近、私も仰天したが、You Tube でスナイパー説を発信し続けているチャンネルの一つで、チャンネル主が、「スナイパーは、ここから撃った」として、あの角にある——ということは四角洲をほとんど真下に見下ろしている——あの辺で一番高いビルの 5 階あたりの部屋や屋上を特定して、ここからこう撃てば、ああ当たる、と見事に説明してくれていた。もちろん私には、難しいところは分からないが、少なくとも銃殺のメカニズムに関する限り、非の打ち所のない、完璧な——あくまで「これなら可能だ」という蓋然性の解明という意味において——説明を提示してくれているように思えた。おまけに、どこかのテレビ放送が当日ヘリコプターから撮って流した映像中に、そのビルの屋上にテントを張って数人の人が行ったり来たりしている様子が確認できる、という情報が流れてきたものだから、その傾向の人たちは、すわと色めき立った様子であった。もちろん、ビルの持ち主は、激怒したことであろう。間もなく、誰かによるインタビューを通しての形で、「あの日は、前から予定されていた、エアコン関係の機器の点検が実施されていた。テントも人員もその関係のものである」と、明らかにしたことになる。おそらく、あのチャンネル主に対しても、「デマを拡散している」といって非難する声も少なくないのであろう。だが、私などは、あのビルが今回ことさらに話題になったことを通して、あらためて認めさせられた点として重視せざるを得ないのは、あ

のビルが奈良県警にとってはノーマークであって、屋上または高層階に警官が配備されることはなかった、高所警戒に大きな抜かりがあった、ということである。上にも述べたとおり、あのビルの屋上あるいは高層階の窓からは、ABEさんの演説場所がほとんど真下に見下ろせる。あそこに1人の警官も配備されていなかったということは、どんな素人から見ても、警備計画の大きな欠陥以外の何ものではない。あのビルの屋上または高層階で見張っている警官がいたならば、あのビルからスナイパーの動きがなかったのなら、「なかった」ということで、即確認されていたことになる。もし少しでも「あやしい」と見られる動きが、その警官によって認められたなら、「念のために」ということで、ビルの防犯カメラに写った映像を検査して確かめるということができた筈である。これもまた、警備の杜撰さが初動捜査のミスに直結した例であるというべきだろう。

以上によって見られたとおりの、奈良県警の窮状から判断する限り、予想される結末として最有力なものは、「不起訴」である。物証を出せないような起訴状を作成することを、検察が承知するわけがない・・・と思われる。でも、起訴できずに終わらせてしまったら、奈良県警は今後も絶対に国民に顔向けできなくなってしまう。だから必死になって、検察を口説く。YMGGMの「自白」から精々もってもらい、一連のストーリーを作り上げ、YMGGM銃がちゃんと期待通りに働いたことを窺わせる状況証拠をかき集めて、地検の担当官に縋りつかんばかりにして、懇願するに違いない。それが功を奏して、起訴は行なわれる。そして裁判が、さしあたって第一審は奈良地裁で、開かれることになるだろう。とはいえ、ここでも普通の予想を立てるとしたら、検察の出した起訴状は、弁護側によって簡単にひっくり返され、「無罪」判決が出て、検察が面目を失うであろう、というほかないように思われる。しかしながら、今、私が心中秘かに予測しているところでは、そうしたごく常識的な予想も裏切られて、実際には、YMGGMの単独犯行を認定し懲役刑を科するという判決結果が出ることになるに違いない。実のところ、私は最近、それを考えずにいられないために、深い憂鬱感に襲われ、気分も体調もかなりすぐれないのである。ひょっとしたら、それは、日本の国にとって終わりの始まりを印す出来事になるのかもしれない、と真剣に心配している。第一審、「求刑10年に対し、情状酌量により8年」——この忌まわしい判決結果を聞かされる日がどうしても来るのを避けられないのか、と思うと、気は滅入るばかりだ。

とにかく、誰が見ても強引・無理押しの起訴状が出されるのだから、その裁判の判決をどのような方向に持っていくかは、端的に言って、弁護側（ということは背後勢力）の匙加減ひとつにかかってくる、といっても過言ではない。理屈の上で考えられる弁護側の戦術は、といえば、次の3通りになると思う：

1. YMGGMの心神喪失を言い立てて、無罪を勝ち取る。
2. 検察の挙証の不備を衝いて反証を挙げて対抗し、「殺害」についての推定無罪を勝ち取る。
3. YMGGM単独犯行はそのまま認め、情状に訴える弁護で刑期の縮小を勝ち取る。

1. は、弁護側がその気になれば、そんなに難しいことではなさそうだ。すでに YMGM の供述に相当怪しい部分があるので、精神鑑定にかける、というようなことがなされているらしい。裁判の時に、弁護側が都合の良い精神医の鑑定結果を呈示しさえすれば、通る可能性は高い。警察・検察の側にとっても、そういう結論は、必ずしも悪いものではない。殺害の実行者が YMGM 一人であることは、暗に承認されたことになるし、無罪にするといっても、その理由によったのである限り、厳重な保護観察下にずっと置くのであるから、今後将来に再び惨禍を引き起こす心配もしないですむ。ただし、実のところ、弁護側がこの方針を採ることは、絶対にあり得ない。この裁判に限っては、絶対にあり得ないのだ。そもそも弁護側（つまり背後勢力）が、ここまで思惑どおりに事を運んでこられたのは、YMGM の ABE さん殺害に至る動機が、優れて合理的な思考に根ざすものであった、という前提が生きていたからであった。母親→KYOKAI→ABE さん、と恨みの対象が推移したのは、YMGM の冷静な認識力の働きによって理由づけられているのでなくてはならなかった。そのところが動揺することのないように、それこそメディア総出で、ABE さんのビデオメッセージまでクローズアップして見せて、補足説明というか援護射撃に努めたのではなかったか？今になって、あれは錯乱・妄想の為せる業であった、などというのでは、せっかくうまくいった、それまでの工作成果を、いっぺんにぶち壊してしまうことになる。幻滅感を味わわされた世人のうち、少なからぬ者たちが、詐欺に遭った被害者のような気分になって、今度はこちらに矛先を向けてこないとも限らない。そういう事態には、絶対に陥ってはならないのだ。

2. は、問題の、挙証不十分の故を以て「疑わしきは罰せず」の推定無罪が帰結する、という場合である。審理がこのコースを辿るための必要条件は、YMGM が供述を翻すことである。警察では強制されて真実ではないことを白状させられたけれども、本当は自分の撃った弾は当たっていなかった、とか、あれは空砲であった、とか、そもそも自分にはそんな高性能の銃を製作することはできない、とか、YMGM が言い出してはじめて、その展開は可能になる。だが、逆にいうと、YMGM がそういうふう言い出しさえすれば、推定無罪という帰結は、ほぼ間違いなくもたらされるようなものだ。検察がどう足掻いても、致死傷を与えたという銃弾を示すことができないのは、決定的欠陥だ。司法解剖の結果と称するものに基づいて YMGM 弾の侵入を説明しようとしたところで、それに対しては福島教授記者会見での発表内容との食い違いの問題が持ち出される。両医師が証言台に立つという事態になった時、どちらの証言の方に、より高い信憑性が認められるか、それはいう必要もないことのように思われる。少なくとも、福島教授の証言の影響力を潰してしまうほどの圧倒的な信用度を、司法解剖医が獲得できるとは、考えることができない。まことに、検察にとって悪夢以外の何ものでもないシナリオのように見えるのだが、しかし、この展開も、現実には起こってこない。上に挙げた必要前提条件が満たされることはないからだ。YMGM は供述を翻さない、たとえ、彼がそれを望むことがあったとしても、弁護人（つまり背後勢力）はそれを許さない。YMGM の捕まった瞬間の様子を、多くの人が映像で見たと思う。彼には、

逃げたり、発砲して抵抗したりしようとする意欲がまったく感じられなかった、自殺しようとする素振りも見られなかった。強い達成感を持って捕まっていたように見える。よほど ABE 氏殺害の成果に満足していたのであろう、いや、ひょっとすると、彼は、自分がダミーにすぎないことを知ってはいたものの、それでもその脳内では、自分こそ作戦の主役であり、お手柄の射手である、との夢見る想念にとり憑かれ、恍惚の境に入っていたのかもしれない。いずれにせよ、簡単に捕まったところを見ると、彼は、警察で供述することを次の使命として授けられていたに違いない。いよいよその使命第二段階に入って、完全な意味で自分が主役を演じることになる、という思いによって、恍惚の度は、高まっていたのかもしれない。だから、彼が、裁判になった途端に供述を翻すということは、到底考えられないのである。さらに弁護側（つまり背後勢力）が YMGM の供述翻しを絶対に許さないと決めている、その理由については、ほとんど説明するまでもないであろう。「合理的思考によって自分の恨みの対象、銃弾の標的としての ABE 氏に辿りついた YMGM の単独所行」という根本構成（「フィクション」といいたいのだが）を、絶対に崩すことがあってはならない、という事情については、上に 1. のところで述べたとおりだが、さらに今問題にしている「YMGM 推定無罪」のシナリオに嵌ってしまうと、必然的に、「やはり真犯人は別にいたのだ」という世間の疑念を呼び覚まし、ひいては YMGM を操っていた、あるいは利用していた背後勢力（つまり自分たち！）の存在に、世間の注目を集めることになってしまう。これは、やぶ蛇とでもいうのだろうか、あまりにも愚かな帰結である。そんなわけだから、シナリオの 2.（推定無罪コース）というのは、実のところ、弁護側（背後勢力）こそが忌み嫌い、絶対に回避しようと心に決めているところのものなのである。

そこで結局、3. が、弁護側の現実を選択し得る唯一の法廷戦術を示しているのである。そして弁護側がその戦術に出てきてくれるということは、検察にとっても、願ってもない仕合わせということになる。そこで、検察側と弁護側との利害は、完全に一致する。利害の一致するところ、馴れ合いが生ずることは避けられない。検察と弁護側との間で、起訴以前におけるいずれかのタイミングで、必ず裏取引が成立する。その場合、普通に考えれば、弁護側から持ちかける形になる可能性が強いから、「YMGM 単独犯行を認める。挙証の不備については争わない。その代わり、当方が情状酌量を求めて繰り広げる弁護を妨げることなく、当方に自由にさせろ」という弁護側の申し入れを、検察が承知する形で、協定が結ばれることになると思う。それでも、裁判の行方は決したのも同然である。裁判が開始され、公判の様子が報道される度に、欲求不満的な思いを抱く人は少なくないのかもしれないが、もうそれはどうすることもできない。「第×回公判」とかいう見出しが付いていたら、そのニュースは見ない、と決めておいたほうが、ストレス食らう程度は小さくてすむ、というぐらいのものだろう。それに、付け加えていこうとすれば、この「YMGM 単独犯行認定・情状酌量」のコースは、検察、弁護側にとってのみならず、裁判所にとってもたいへん有益な帰結を間違いなくもたらしてくれるものなのである。弁護側のお涙頂戴ストーリーに乗った弁論をしっかりと聞いた後で、求刑よりは短い刑期の寛大な判決を出す、ということをしさえす

れば、マスコミ＝世論は、「司法権の独立を守った（＝被害者が ABE 氏であるからといって、行政府の意向を忖度することなく）」とかいって、やんやと褒めそやすに決まっているからだ。検察・弁護・裁判所——三方一両得みたいな大団円は、新憲法発足以来 80 年に近くなろうとする法治国家日本にとって、喜ばしい、記念すべき出来事となるのであろうか？ 私には、その反対のもの、つまり先述のとおり、日本の国の終わりの始まりを示す出来事になるような気がしてならないのだが、その辺りは「言わぬが花」の類いかな？

でも、こういう気の利いた言葉を出してしまうと、却ってもっと言わずにはいられないような気になってくるというのが、不思議なところである。最後にもう一つだけ、余計なことを言うのを、お許しいただきたい。上記の検察・弁護・裁判所の三方一両得の帰結を引き出す有力な推進力の一つに、「YMGGM 単独犯行以外の結論を認めない」とする世間的思い込み（面倒だから普通は「世論」と称する）の力がある、と気づいている方は多いと思う。こういう思い込みがどうやって生じてきたのか、と考えるならば、メディアの報道で YMGGM の悲惨な境遇からくる動機について何度も聞かされているうちに、彼に対する同情のあまり、「彼は ABE を殺害することによって志を果たしたのだ」と信じてやることに、せめてもの慰めを見出そうとし、挙げ句に、「ABE が倒れたのは、彼の単独犯行によることでなくてはならない。異論は許さない」という心持ちになるのだと思う。だから、それは、民衆洗脳という、背後勢力の作戦の一環を成している現象である、とっていいようにも思われるが、すでに YMGGM 減刑運動などというものが大々的に繰り広げられ、多くの署名を集めていることから窺われるとおり、洗脳を受けた民衆の心は、成長を遂げて、得体の知れぬ——漠然と「世論」と呼ばれるしかないような——ものながら、それ自身独自に社会を動かす力になっている、と見られるべきであろう。「世論が、彼を真犯人としない限りは許さない、という気持ちになっている」——この強烈な圧力が司法に対して働いている状況である、という認識から、私は、あの 60 年以上前に起こった、名●毒ぶどう酒事件のことを思い出さずにはいられないのである。あれは酷い事件だった。最悪の冤罪を生み出して、●●●マサル氏の人生を、国家権力がズタズタに引き裂いたのである。村の懇親会の宴会で、女性会員（出席者 20 名）限定で振舞われたぶどう酒を飲んだ女性のうち 5 人が死んだ。ぶどう酒に毒が仕込まれたことはすぐに分かったが、現場に駆けつけた三重県警——というより最初は名●警察——の捜査員は、初動捜査に致命的なミスをして、混乱の中で、証拠物件を粗雑に扱い、犯人を割り出すための物証となるべきものを、すべてゴチャゴチャにして、役立たずにしてしまった。今、当時の記録を見る者は誰もが、犯人は死んだ 5 名のうちの一人であり、彼女の自殺に 4 人が巻き添えを食わされた、変則的無理心中であることを、直観的に認識することができる。だが当時、初動捜査に失敗してしまった捜査陣は、死者の犯行を暴くための手がかりを、すでに完全に見失ってしまっていた。仕方なく、宴会参加者のうちから動機を持つ人間を絞り出す作戦に出た。「三角関係」の清算を図った可能性があると言われた●●●マサル氏が浮かんできた。死んだ 5 人の女性のうち 2 人が偶々彼の「三角関係」の二角を成していた、という事実には縋り付いたのだ。マサル氏を捕らえた捜査本部は、「三角

関係清算の意図」なる彼の動機を、マスコミを使って全国津々浦々に言い触らした。そして彼自身に口述させて詳細な犯行計画・実行のストーリーをせっせせせと作り上げた。でもその内容を裏付けるような目撃証言は見当たらなかった。物証となると、一切出てこなかった。中でも絶対に出てこなくてはならない筈の凶器つまりぶどう酒に混入させた毒薬が見つからないことについては、いくら何でも、何かもっともらしい説明をつけなくてはならない。そこで、世紀の大傑作「幻のニッカリン」を創作することになったのだ。その農薬は、売ってもいない店から買われて、使用後の残りは、密封されたまま、遙か大海へと続く川の流れにプカプカと浮かんで姿を消したのだそうだ。マサル氏がそのことを「暴露」した、ということにされてしまった。そしてとうとう、マサル氏の自白内容とされるもの以外にまったく見るべき内容を含んでいない起訴状が、津地裁に提出された。裁判で、マサル氏は供述を翻した。取調室に閉じ込められて、無理矢理、語らされた内容をすべて否定した。判決は、当然「無罪」であった。津地裁は、司法として正しい判定を下した。「申し分なく」といいたいところながら、実はただ一つ、大きな失敗をしてしまった。それは、「空白の10分間」を肯定してしまったことである。マサル氏には、一人だけでぶどう酒の瓶と一緒にいる10分間ほどの機会があった、と認定してしまったのだ。検察の挙証内容は、ほとんどすべて疑わしい、とせっかく見破ったのに、「空白の10分間」だけは、検察のいっているとおりでよい——本当は、これも十分あやしかった筈なのだが——と、余計なことを判決文の中でいってしまった。これが検察の息を吹き返させた。よし、それなら他の関係者はすべて——死んだ者も含めて——、一人だけでぶどう酒瓶と一緒にいる機会は無かった、と証明することにしよう。そうすれば消去法で、毒を入れることができたのはマサルだけである、と立証できることになる——こう考えた検察は、前回にも増して並々ならぬ努力を注入して、他の関係者たちのアリバイ工作に奔走した。そうして控訴審用に再提出された起訴状に、名古屋高裁は、いとも簡単に騙されてしまった。「一審の判決破棄、死刑」——マサル氏に対する、永久に許されてはならない国家権力の犯罪が、この時に行われたのだった。さて、ここまで我慢して読んでくださった方なら、「それで、いったい何が言いたかったのだ？」と尋ねたい気持ちになられていて当然と思われる。なるほど、初動捜査の失敗からマサル氏犯人で行くしかない窮境に追い込まれていた、当時の三重県警の立場は、この度の奈良県警の立場に似ているとはいえよう。だが、それだけのことをいうために、わざわざ六十年以上も前の話を引き合いに出してこなくてもよさそうなものだ、と仰せになりたいのかもしれない。だが、ご面倒をおかけして申し訳ないが、上で名●の話を出す直前に私が語った言葉を、もう一度思い起こしていただきたい：世論が、彼を真犯人としない限りは許さない、という気持ちになっている、そして、その強烈的な圧力が司法に対して働いている状況が生じてきている、ということにおいて、この度の ABE さん暗殺事件は名●毒ぶどう酒事件と似た様相を呈している、と私は言おうとしていたのだ。六十年以上前のあの当時、捜査本部が新聞、テレビ、ラジオを使って全国に広めた、「三角関係清算の意図」というマサル氏における動機の説明は、人々にきわめて大きな衝撃を与えた。人々は皆、マサル氏のことを、何と卑劣な男か、と違って

激しく憎み、証拠が揃っているかどうか、など考えてみもしないで、あの男が犯人に違いない、犯人はあの男以外にいる筈がない、とひたすら集団的思い込みの中にのめり込んでいった。検察があの貧弱な挙証しかできないのを承知の上で起訴に踏み切ることができたのも、一つには、そのようにして形成されていた「世論」に後押しされてのことであった、ということもできると思う。「世論」が自分たちの方についているから、何とかなる、という楽観的観測が働いたということである。津地裁には、その圧力をはね返すだけの根性があったが、二審の名古屋高裁は、もろくもそれに屈してしまったのだ、という見方もできよう。この度、ABEさん殺害事件が起こって容疑者 YMGGM が逮捕された直後から、世人は、メディアを通して、YMGGM の可哀想な生い立ちからくる動機について、いろいろ多くのことを聞かされた。その結果、夜の人々は、YMGGM こそは KYOKAI の悪事によって苦しめられた人間であり、KYOKAI に影響力のある権力者をつけ狙うに相応しい人間である、と理解し、ABEさんを殺したのは彼であるに違いない、彼以外に犯人がいてよい筈がない、と固く思い込むに至ったのである。六十年前、「世論」が「犯人はマサル以外にはあり得ない」と早々と決めつけたと同様に、この度の「世論」は、「犯人は YMGGM 以外にはあり得ない」と決めてかかって、その上でもう、驚くべき手回しの良さで以て、「減刑運動」まで繰り広げている（最近では、拘置所に現金まで届いているそうだが、その奇特な方、YMGGM が無罪になる可能性もあると思っけていても、同じことができますか？）もちろん、「犯人は彼以外にはあり得ない」と決めつけにかかる時に働く「世論の心」は、マサル氏に対する場合と、今回 YMGGM に対する場合とでは、大いに異なる、というか正反対である。マサル氏に対しては、「世論」は「三角関係の清算の意図」という動機に見られる、その卑劣さ——いうまでもなく、それはマスコミによって刷り込まれた謬見であったのだが——を激しく憎み、あのような酷たらしい犯罪を起こせるのは彼以外にない、と思い、だからこそ、確と有罪を宣告して極刑を与えよ、と吠え立てたのである。それに反して、YMGGM に対しては、「世論」は、彼の生い立ちからくる動機に同情し、彼のように苦しんだ人こそ社会の悪に対する制裁の義挙に出るに相応しい、と思っけて、だからあの権力者殺害は彼の所業でなくてはならない、彼はあれで志を果たして「義士」になったのだ、と固く思い込んでしまったというわけだ。だから、彼の有罪を認定して極刑に処せなどという筈がない。そうではなくて、彼の所業は所業として認定し、かつその動機に含まれる理を明らかにして、寛大な処分とせよ、とっけて騒ぎ立てているのだ。だから「世論」が社会に影響を及ぼす力になって作用しているといっけても、その作用の仕方も、マサル氏の時と、今回の YMGGM の時とでは大いに異なる。マサル氏の時の「世論」は、検察にだけは背中を押す力として働いたけれども、弁護側に対してはきわめて大きな妨害力となった。そして——考えたくないことかもしれないけれども——、裁判所に対しても、公正な判決を妨げる重圧の力となって働いた。その力の影響を考えなくては、名古屋高裁の出したあの不可解な判決を説明することはできないのである。これに反して、今回の YMGGM に関する「世論」は、どこに対しても、見かけの上では、圧力としての作用はしていないようだ。強いて言えば、「他に真犯人がいる」という陰謀論者を排除す



る力として働いている、というぐらいであろう。そういう細かいことを度外視してしまえば、上述の三方一両得をもたらす力として、それは働いているのだから、どの方面に対しても良い影響力を発揮していることは間違いない。そしてめでたく三方一両得の結果が最終的に成立した時——つまり「懲役 8 年」が最高裁で確定した時——、「世論」にはいよいよ次の段階の仕事、つまり YMGGM の更生支援が委ねられることになる。服役中においては、人を殺めたことは罪として、しっかり償うことを教える、つまり認罪教育を施す。刑期満了後は暖かく社会に迎え入れて、生計の道を世話してやる——こうしたことは、その時期になれば、問題なく実行されるであろう。それで、犯罪者の社会復帰も果たされることになるのだから、これが本当の完全なる大団円である。思えば、六十年前の「世論」は、司法に不当な圧力をかけて、マサル氏の半生を地獄の底に沈めるといふ、絶対に許されない間違いを冒してしまった。それに引き換え、この度は、最長任期を務めた元首相の暗殺という前例のない国難に際して、急遽立ち上がった「世論」が、殺害者の裁きにおける司法の諸機能の理想的な調和をもたらし、加えて殺害者の円満なる社会復帰の成就という慈善事業まで遂行することになる。六十年前と今との、この著しい対照は、私たちを感じ入らせるに十分なものではないだろうか？日本もよくぞ法治国家としてここまで成熟するに至ったものだ、と素直に喜ぶべきところに違いない。ひょっとしてこれは日本の国の終わりの始まりかもしれない、などと勿体ぶった疑いを挟んでみせるなど、よっぽど捻くれて世を拗ねているような人間の取る滑稽な態度でしかないのだ・・・と言いきれるものなら、よいと私も思うのだが・・・